

卒業論文

タイの貧困者運動  
～ 居住権獲得をめざして～

外国語学部英語学科

A0451228 佐久間綾子

国際関係副専攻 下川雅嗣准教授

## 目次

### はじめに

#### 第一章 タイ政府の居住運動

##### 第一節 UCDO から CODI へ

##### 第二節 バンマンコンプログラム

##### 第三節 日本政府との違い

#### 第二章 HSF の取り組み

##### 第一節 HSF の始まり

##### 第二節 HSF の主な活動

##### 第三節 HSF の特徴

#### 第三章 スーイット・ワトゥヌー氏

##### 第一節 エック氏の追悼文

##### 第二節 スーイット氏について

### おわりに

### 参考文献

はじめに

現在、世界の人口の約半数の人々が1日2ドル以下の生活を送っている。彼らが貧困から脱却するために国際機関や、先進国、NGOなどが無数の開発援助プロジェクトや貧困削減プロジェクトを行ってきた。しかし、未だに世界の貧困者の数は増え続けている。それには様々な理由が考えられるが、その一つとして今行われているプロジェクトの大部分が貧困者ではなく上からの目線でなされていることが問題ではないかと筆者は考える。つまり、問題の中心であるはずの貧困者は蚊帳の外で、先進国がひいては自国の利益になるような活動を行ったり、実態を知らない外部者がその場限りの援助を行ったりすることで真の貧困からの脱却はありえないのである。それよりも、貧困者自身が主体となって活動する People's Process<sup>1</sup>の方が本当の発展を目指すことができるのではないか。

もともと筆者はなんの力も持たない人たちがわずかに集まったところで大した力にはならないと思っていた。しかし、大学で様々なことを学び「少ない人数でも強い意志を持った人々が集まれば強い力になるのかもしれない」と思うようになった。この論文では、人間居住財団 (Human Settlement Foundation :HSF)<sup>2</sup>という限られた人員でタイの各地で活動を行っている団体に注目し、少人数でも貧困者と共に People's Process を進めていくことで大きな力と成り得ることを証明したい。

まず、第一章ではタイの政府の側からの活動を見ることによってタイの貧困者を取り囲む環境について考える。第二章では HSF の歴史と活動に注目し、どのようにして限られた人数のなかで効果的な活動をしているのかを考察する。そして第三章に今は亡き HSF のリーダー、スーイット・ワトゥヌー氏について彼の後継者の一人であるエック氏 (Abhayuth Chantrabha) が書いた追悼文の日本語訳を掲載し、タイ社会の下層階級の人々の闘士と謳われるスーイット氏について考える。

---

<sup>1</sup> People's Process の特徴は「共同性が大切にされ、多くはコミュニティを基盤とした取り組みであること、創造的な試みであること、貧困者同士の経験交流などの学び合いのプロセスで広がっていること、目的重視というよりはプロセス重視の傾向を持つこと(下川 2008)」である。

<sup>2</sup> 2005年の時点では団体には6人の正社員と6人のボランティアが所属している。(SELAVIP “Human Settlement Foundation 2005 Annual Report”)

## 第一章 タイ政府の居住運動

### 第一節 UCDO から CODI へ

タイでは 1960 年代に本格的な経済開発が始まった。80 年代までは高い経済成長率を維持してきたが、その一方で 60 年代以降都市部ではスラムが急増し、農村部でも貧困が拡大し、貧富の差がどんどんと広がっていった。それに対して都市スラムコミュニティではネットワークづくりによって強制排除を阻止し、農村部では自分達で組織を作りネットワーク化を進めた。そして 1995 年には都市部と農村部の貧困者が協力して、「貧民連合 (Assembly of the Poor)」というネットワーク組織をつくった。一方、タイ政府内でも、そのような People's Process を強くしていくことが真の国の発展につながるという考えから「都市コミュニティ開発事務局 (Urban Community Development Office :UCDO)」が 1992 年に創設された。UCDO はタイ住宅公社 (National Housing Authority) の下に置かれていたが、独立した意思決定機関である理事会をもっていた。その理事会の構成員は政府代表 3 名 (経済社会開発庁、大蔵省、中央銀行)、民間代表 3 名 (民間企業、NGO、学識経験者)、そしてスラム住民代表 3 名というユニークなものだった。UCDO の主な事業は、都市スラムコミュニティで作られた貯蓄グループに対する回転資金の提供であった。この特徴はそれまでの政府主導のトップダウンのような方法ではなく、貯蓄グループを基にコミュニティ開発基金をつくり、UCDO からの回転資金や寄付金を集めコミュニティが直接そこにアクセスできたことである。また 8 年間で 350 回以上のワークショップや研修が行われ、たくさんのスラムコミュニティに貯蓄グループが設立された。

その後、UCDO は農村部の貧困者コミュニティと協力し合うべきという考えのもと 2000 年に「農村開発基金 (Rural Development Fund)」と合併して「コミュニティ組織開発機構 (Community Organizations Development Institute :CODI)」を設立した。それから、「理事会の構成、政府からの自立性、コミュニティの発展、People's Processこそが真の発展であるという考え方、ネットワーク化の推進、といった UCDO の性格は引き継がれ、また進展した。」<sup>3</sup>CODI のビジョンはコミュニティ組織と市民社会の力によって根本から強い社会をつくることであった。

2003 年、当時のタクシン首相は都市ごとにすべてのスラムを改善していこうとした。しかし、タイ全国にはあまりにも多くのスラムコミュニティがありタクシン首相の考えはあ

---

<sup>3</sup> 「貧困者の歩みの発展：パキスタン、タイ、カンボジアの事例から 下川雅嗣 (2008)」から引用

まりにも強引で実行不可能なものだった。そこで CODI はそれまでの経験や知識を活かし、CODI が把握しているネットワークやコミュニティを使い政策を実行するよう政府に提案した。その結果 2003 年 1 月、「バンマンコンプログラム (Baan Mankong Program :安心できる住まい計画)」が承認された。

## 第二節 バンマンコンプログラム

バンマンコンプログラムは 2008 年までに 200 市町、2000 都市貧困コミュニティ、300,000 世帯の住宅、インフラストラクチャー、そして生活環境の改善を目的としてつくられた。具体的には都市ごとに住民、地方自治体、学識経験者などがあつまり、都市の調査を行ってそれぞれコミュニティにあった問題の解決策を探していくのである。プログラムが開始された 2003 年には、タイ各地から 10 のコミュニティが選ばれ計画を実施した。そこで経験を積んだ人々が各コミュニティを訪れ、互いに教え合い・学びあいのプロセスを行った。バンマンコンプログラムでも People's Process は重要だと考えられているのである。

財政支援は中央政府によって行われる。計画ごとに決められた額までの補助金が渡され、それ以外の経験交流プログラムやセミナーなどで必要になったお金は CODI から助成金が支払われる。また、住宅建設には貯蓄グループでの貯蓄や CODI からの回轉資金融資が使われる。例えば、元から住んでいる家の改善には 625 ドル、住んでいた場所に家を建て直す場合には 1125 ドル、新しい土地へ引っ越す場合には 1625 ドルなどと金額が決められている。

2007 年 2 月現在のバンマンコンプログラムの実績は、75 県の 214 の市・地方、773 のコミュニティ、45496 世帯で現在進行中であり、すでにインフラ設備のための助成金は 13 億バーツ支払われ、住宅建設のための融資は、14 億バーツ貸付されている。

## 第三節 日本政府との違い

ここまでタイの貧困者の居住問題に対する政府の取り組みについて述べてきたが、タイ政府は日本政府とはまったく異なった考えをもっていることがわかる。印象的なことは、タイでは強者である政府までが People's Process の可能性を信じているということである。日本では野宿者に対しては強制排除をおこなうだけ、もしくはその場しのぎの寝場所を与えるだけで、野宿者はコミュニティをつくることもできない。日本には貧困者を同士のつ

ながらで国がよくなるという考えは皆無である。しかし、タイでは弱者を排除して強い者、勝ち残った者だけで強い社会をつくるという個人主義の欧米的な発想ではなく、コミュニティを大切に協力し合うというアジア的な考えがいまだに残っているということではないだろうか。つまりタイは People's Process が広まりやすい環境であるといえる。このことは第二章で論じる HSF の活動に少なからず良い影響を与えているだろう。

## 第二章 HSF の取り組み

### 第一節 HSF の始まり

1982 年の半ば、3 人の若いソーシャルワーカーがバンコクで 8 つのスラムコミュニティと活動を始めた。彼らは行政が無視しているコミュニティ内の子供達の問題や、公共施設の課題に取り組むことを目的とした。彼らはスラム住民と共に活動し、そしてその住民を「スラム居住者発展クラブ (Dwellers Development Club)」として組織した。

1983 年の終わりには、彼らの活動は 13 のコミュニティに広がりスラム居住者発展クラブは「コミュニティ関連グループ (Communities Relation Group)」に進化した。このグループの目的は日々深刻さを増していく強制排除に対する準備等を含めたコミュニティ内の問題解決についてスラム住民同士が経験交流をする場を作ることであった。

1985 年 8 月、グループはスラム住民をコミュニティの発展や居住問題解決に参加させるべく 13 のコミュニティを組織し「スラムギャザリングセンター (Slum Gathering Centre)」を作った。1986 年にはスラムギャザリングセンターは「スラム発展連合協会 (United Slums Development Association :USDA)」と名前を変えた。USDA は現在にいたるまで民衆のための組織としてスラムの発展のため活動を行っている。USDA はスラムコミュニティの更なる発展のために主婦グループ、住宅基金、住宅協同組合を作った。

1987 年コミュニティ関連グループは「人間居住財団 (Human Settlement Foundation :HSF)」として法的な登録を要請し、1988 年 6 月それが正式に認められた。

## 第二節 HSF の主な活動<sup>4</sup>

現在 HSF が行っている様々な活動の中で特に3つの活動に注目したい。まず一つ目は USDA に対する支援である。前節で述べたように、HSF (当時はコミュニティ関連グループ) は USDA の設立に協力した。それ以来 USDA はスラム住民と共に強制排除に立ち向かってきた。そして、USDA の成長に伴い数年前から HSF は段階的に援助を減らしていった。しかし、その後 USDA では委員会と職員の対立が生じ組織が弱体化してしまった。そこで2005年 USDA は HSF に組織再生の支援を要請した。HSF は主に以下の活動を行った。

- ・ コミュニティ作りをする4人のUSDA職員の教育
- ・ 22のUSDA会員組織のためのセミナー
- ・ USDA内の主婦グループに新しい運動を作りだすよう促した
- ・ USDAの元にある住宅基金と住宅協同組合の仕事の監査
- ・ 職員の対立の調停

二つ目はコミュニティ同士のネットワークを強くする手助けである。タイには4地域スラムネットワーク (Four-Region Slum Network) というタイ全国を東北部、北部、南部、中央部にわけ、全国レベルでのネットワークを持つ組織がある。HSF は4地域スラムネットワークに情報提供をしたり、リーダーやスラム住民のトレーニングを行ったりしている。他には土地改善ネットワークへの支援もおこなっている。このネットワークは北部農民組合 (Northern Farmers Federation)、4地域スラムネットワーク、南部森林土地リンク (Southern Forest and Land Link)、北東部森林土地リンク (Northeastern Forest and Land Link) で構成されているネットワークで年に6回ものキャンペーンを行うなど、精力的に活動している。そして、2004年12月26日に大津波が起きた後は4地域スラムネットワークを通して被災者のオーガナイズをして彼らの復興活動に貢献した。2005年には HSF は徐々に活動から手を引き、現在被災者コミュニティは南部のネットワークと協力している。

そして3つ目は橋の下のコミュニティに対する支援活動である。この活動については下川先生の HSF 活動調査報告をおかりして詳しく述べたいと思う。

---

<sup>4</sup> この節は下川先生がタイで HSF の活動調査をした報告書「タイにおける国際居住年記念賞受賞者の活動現状調査報告」と「SELAVIP Human Settlement Foundation 2005 Annual Report」をもとにしている。

1996年から97年にかけてバンコク市は橋の下で生活する人々全員を強制排除する政策を始めた。彼らは67の橋の下にばらばらで住んでいたためコミュニティが形成されていなかった。そして、当時彼らと関わっている団体もいなかったため橋の下に住む人々は強制排除に対して何もできなかった。そこでHSFは彼らの住む67の橋を4つにわけ組織化を行った。組織化された人々はグループごとに自ら再定住の地を探し、市に提案をした。本格的な移転は2001年から始まり、それから彼らがコミュニティとなっていくための様々な支援が行われた。HSFはコミュニティの組織化、貯蓄グループのシステム作りの支援、生活環境の改善や子供達の教育などに関する支援を行った。また、住宅に関しては住民達が自分達で計画を行い、コミュニティ内の貯蓄グループがCODIから融資を受け、個人が貯蓄グループから15年の返済期限でお金を借りるという方法をとっている。下川先生は彼らの再定住地の一つであるフーサップコミュニティを訪問し「印象的であったのは、その街並みの賑やかさであった。(中略)通りを歩くに沿って、まずは花を作っている区画、そしてピンを粉々にしている区画、魚の塩漬けを作っている区画、銅線や銅を取り出している区画、といったようにインフォーマルセクター見本市のような印象的な街ができていた。」とおっしゃっていた。

### 第三節 HSF の特徴

今回筆者が取り上げた3つの活動以外にもHSFはホームレス支援活動や、スラム住民の強制排除に立ち向かう活動など様々な活動を行っている。その場の状況に応じて多種多様な支援をしているHSFの活動には全てにおいて共通するものがあるように思う。それはいかなる場合でも決して自分達が活動の中心にはならないということとネットワークや他の組織との協働を大切にすることである。例えば、橋の下に住む人々に対する活動にしても土地を探したのは住んでいた人々自身であるし、組織が弱体化してしまったUSDAに関してもHSFが行ったのは職員の教育や仕事の監査などで彼らがUSDAのスタッフになったわけではない。HSFは非常に少ない人数で活動している組織だが、彼らが活動の中心にいるのは当事者である貧困者であるというスタンスを持ち続けている以上、実際に活動をする人々に事欠くことはないであろう。

また4地域スラムネットワークや津波被災者のコミュニティなどのネットワークに対する支援はPeople's Processの発展にも大きな役割を担っている。なぜならPeople's Processにおいて貧困者同士の学びあいのプロセスはとても重要なものであるからだ。

そして、HSF は貧困者や他の団体だけでなく NHA、経済社会開発庁( Board of National Economic and Social Development )、バンコク都市行政部 ( Bangkok Metropolitan Administration )、UCDO、そして地方自治体などの公共事業機関とも協働している。このことも HSF の特色といえるのではないか。もちろん主体は貧困者であるが、このような行政機関との調和を計ることによって活動が成功しやすく、あるいは邪魔をされにくくなるのである。HSF が小さな組織であるにも関わらずタイ全国で活躍している背景には貧困者が主体で自分達はその支援をする存在であるという考えと、他の組織や公共事業機関との協力があることは間違いないだろう。

### 第三章 スーイット・ワトゥヌー氏

#### 第一節 エック氏の追悼文

貧困者の闘士、スーイット・ワトゥヌー氏へ

エック ( Abhayuth Chantrabha )

6月9日の夕暮れ、私達はスーイット・ワトゥヌー氏の葬儀を終えサマキ・バンポット寺院からバスに乗りながら彼に最後の別れを告げるため火葬場の煙突を見上げた。私達の目の前に現れたのは煙突からふわふわと漂う灰色の煙だった。私達はスーイット氏の魂が天国の一番良いところに行くことを確信していた。なぜなら彼の30年以上にもわたる貧困者と社会正義のための闘いに対する断固とした態度は確かに彼を天国でも称えられるほど価値のある活動家にしたからである。

スーイット・ワトゥヌー氏はサング・ワトゥヌー、ジング・ワトゥヌー ( Mr. Suang and Mrs. Ging Watnoo ) 夫妻の八人兄弟の二番目として生まれた。、チョンブリ州サタヒップ地方バン・サライ ( Bang Sarey Sub-district ) で生まれ育った彼は生涯を社会正義のための闘いに費やした。彼は州立の高校を卒業後、シーナカリンウィロート大学 ( 今ではブラパー大学として知られている ) のバンセーンキャンパスの教育学部で勉強した。このころからスーイット氏の下層階級のための闘いは始まった。1971年から72年の軍事独裁政権下で起きた進歩主義の学生と知識人の運動はスーイット氏の社会変革に対する考え方を形作った。それに加え、農家の子供として生まれ畑や果樹園で働いていた両親をもつ彼にと

って貧困とは非常に馴染み深いものであった。この二つのことから彼が歪んだ不平等な社会構造に気付き、公平な社会への道を模索したことは容易に理解できる。

スーイット氏が 1973 年に大学三年生になった時には、彼はもうそれまでの運動部でキャプテンをしていたころとは別人であった。その代わりに、学生の社会運動に参加したり、チェ・ゲバラ、毛沢東、ホーチミンの一生やベトナム革命についての本を読んだりしていた。これらの運動に参加したことは将来への準備になり、彼の考え方を育てた。

1973 年 10 月 14 日学生運動は 50 万人以上の正義を愛する人々を連れ軍事独裁政権を倒した。この時スーイット氏もバンセーンから千人あまりの学生を引き連れこの戦いに参加した。

軍事独裁者が追放され、1974 年ごろから、タイに民主主義の雰囲気復活し始めた。憲法草案のための議会が開かれ、選挙の準備がなされ、思想の自由を含めた権利と自由が回復され、学生や農民、労働者の運動が活発に行われた。同じ年、スーイット氏はバンセーンの学生自治委員会で委員長に選ばれた。彼はキャンパス内での活動を組織化するだけでなく、村人達の闘いに参加した。具体的にはタイ小作農連盟の指揮下にある東部地方の農民と共に活動した。その活動は 1974 年から 76 年にかけて多くの人を動員した小作農運動のきっかけになった。

バンセーンでの勉強を終えた後、1975 年にスーイット氏はチャンコル・パラム・ホック (Changkol Praram Hok) 学校の教師になった。彼は進歩主義の教師として民主主義運動を支援する職業訓練生の民主主義グループに生徒たちを参加させた。スーイット氏のメインの仕事は教育であったが、彼の心は常に貧困者のための闘いに縛られていた。彼はよく仕事の後サナムルアン周辺やタマサート大学にデモのために来ていた小作農民達のもとを訪れた。遅くなってしまうと、彼はたびたびタマサートで夜を明かした。(そこはこの時代左翼学生運動の中心となっていたところだった。)そして、夜が明けると彼はまた学校へ向かった。

1973 年 10 月 14 日の出来事の後、右派の人々は自分達の力が弱まっていることを感じていた。その力を取り戻すために 1976 年 10 月 6 日、タマサート大学で元軍事独裁者で陸軍司令官のタノム・キティカチヨンの復帰反対のデモを行っていた学生達を取り囲み殺害した。この事件で死者・行方不明者は数百人、逮捕された学生は 3000 人にもおよんだ。スーイット氏は 10 月 5 日の夜デモに参加していたが、仕事の準備のため 6 日の夜明けに家に帰り着替えをしていたため無傷で逮捕もされなかった。

10月6日の深い悲しみの事件の後、軍は力を取り戻しタイ社会は再び独裁政権の時代に突入した。聡明で正義と民主主義を愛する若いスーイット氏はタイ共産党の赤旗の影でジャングルにこもり残りの人生を革命家として生きるほかなかった。スーイット氏の戦士としての初めての基地はタイ西部スラタニ州チョン・チャン山(Chong Chang)の508中隊であった。そこでスーイット氏はチェド同志(Comrade Cherd)というコードネームで呼ばれていた。強く大きくたくましい体を持った彼は最前線で戦う役目を与えられ、政府軍キャンプへの攻撃や防御など数十回ものすさまじい戦いをした。05NATO(銃の名前)が彼の武器であり、それをいつも持ち歩いていた。

1978年から79年にかけて共産党内で、指導部と学生運動の間でイデオロギー的危機が起きた頃、タイ政府はジャングルから出てきた者には恩赦を約束した66/23政策を1980年に公布した。その時から1982年まで学生達はジャングルから次々と去っていった。しかし、スーイット氏は依然として仲間を見捨てジャングルを去ることを拒んだ。彼は共産党から西部高地チュボン州の一般大衆に活動を広める役目を請けたが1980年まではチョン・チャン基地に留まった。新しいコードネーム「オー同志(Comrade Oh)」を持ち、スーイット氏は労働者階級と共に活動をし、副司令官として5年間任務を遂行した。結局彼はジャングルで革命家として八年以上の時を過ごした。

1985年スーイット氏は学生および知識人で最後にジャングルから出てきた者の一人として都市に戻ってきた。武装闘争の支持・理解が一般民衆から得られなくなってきたこと、さらに、政府の政策による革命家達の困り込みによって実際に党員の軍事力や民衆の力が弱まってきたと判断したからである。それでも彼はマルクス主義の闘士としての誇りを持ち、都市に帰ったときも政府に名乗り出なかった。そして彼は心の傷を癒すためジャーナリストと洋服屋として働いた。

スーイット氏が闘いを止めたのは少しの間だけであった。彼の心は再び闘うことを強く望んでいた。しかし今度は、闘いの場を都市に移し、平和的な手段を選んだ。

1987年、彼はバンコク最大のスラムクロントイで若者と共に麻薬とエイズ予防のキャンペーンを行うためドゥアン・プラティーブ財団で働き始めた。しばらくして、スーイット氏はクロントイの一部で強制排除を受けている人々のネットワークを組織しているHSFで働く人たちと親しくなった。そのネットワークによって人々はスラム住民の居住権と、政府と交渉する力をつけることを目標とした組織USDAを設立した。学生の頃から活動家として社会に関わってきたスーイット氏はドゥアン・プラティーブ財団で行っていた福祉

事業的なコミュニティ開発より HSF や USDA で行っている活動の方が彼に合っていると感じた。そして 1989 年、スーイット氏は HSF に移る決心をした。HSF は後にスーイット氏によって都市と農村の貧困者運動や民主主義運動の拠点となるグループになった。

スーイット氏は現場のスタッフとして HSF の仕事を始めた。彼は古いバイクに乗りたくさんのスラムを訪れた。オーナットゴミ捨て場( On Nut Garbage Dump )、セナ( Sena )、ドニカ( Donika )、ペッチシアム( Petch Siam )、タップガウ( Tap Gaew )、ペッチウタイ( Petch Uthai )、スワンパラシット( Suwanparasit ): これらはすべて、彼が人々と交わり、関係を構築していったスラムである。スーイット氏はほとんど毎日午後三時から夜の八時か九時までコミュニティにいた。彼の活動の仕方は多岐にわたった; 人々に近づく、会話や交流をする、住民と共に働く、集会を開き問題を分析する、作業プランを作るためのミーティングを開く、そして共に活動をする。民衆のための活動家になるにはオーガナイズすることを訓練されていなければならないため、彼が行っていた方法はコミュニティ組織化にはとても大切なこととされていた。

スーイット氏のもう一つのすばらしい才能は交渉することであった。彼の礼儀正しくなおかつ簡潔でいてシャープな上に深い話し方は多くの大臣を黙らせた。さらに重要なことは、彼のこの才能は人々に実際の成功をもたらしたひとつの要因だったということである。

4 地域スラムネットワークが交通省と話し合い国有鉄道の土地の賃貸についての政策を提案したとき、スーイット氏は交通省の代表者にこの問題をこう捉えるように説得した。

「国鉄は使用できる土地を 40,000rai ( 6400ha ) 所有している。約 20,000 世帯の家族が住むために必要な土地は 2,000rai ( 320ha ) である。これはタイ住宅公社の基準によると 1rai ( 0.16ha ) の土地に 10 世帯が住め、標準的には 20 平方 wah ( 80 m<sup>2</sup> ) に一世帯が居住できるとされていることからわかる。2,000rai は 40,000rai のたった 5% でありとても少ない。」この説明により国鉄は貧困者と土地を共有する政策を採択し、貧困者が居住目的で土地を借りることを許可した。このようなスーイット氏の論理的な説明と人々が与えたプレッシャーによって、2000 年 9 月 13 日最終的に国鉄はスラム住民に 30 年間の土地借用を認めた。

それに加え、スーイット氏の興味深い基本的な考え方としてあるのが、誰もやろうとしない新しい活動を開拓することである。特にある時期からはスラム住民ではなく、より厳しい状況にある都市貧困層グループと活動することを大切だと考えていた。なぜならそれは今まで誰もしようとしなかったことだからである。1994 年、スーイット氏はチームの一

員としてバンコク中の橋の下のコミュニティを調査した。7年後、その橋の下に住んでいた人々は当局と交渉し、3箇所新しい住居を手に入れた。2001年にはスーイット氏はHSFが野宿者のグループと一緒に活動を始めたことを発表した。今日、野宿者たちはバンコクノイに、パイロット事業として野宿者たち自身による避難所を作る過程にいる。また最近の活動では、去年、彼は安定した住居へのアクセスが難しい借家人たちの調査をするため仲間を集めた。

スーイット氏は4地域スラムネットワークが1998年に設立したときからのアドバイザーであった。後々、彼が若い世代に仕事を任せ他の活動をしがちになってからも、4地域スラムネットワークの集会には毎年出席した。スーイット氏は彼の知識や経験を用いて団体の活動を分析、評価、批評、そして新しい活動に対する提案の手助けをした。

スーイット氏にとってスラムの問題に取り組むことはただ単にスラム住民の問題を解決することではなかった。なぜならこの問題は土地所有権の分配や所得分配の構造、資源をめぐる闘い、あるいはネオリベラリズムによるものであり、根本的には構造上の問題であるからである。そのためスーイット氏は政府の政策レベルにまでプレッシャーを与えるため、都市貧困層を様々な貧困者グループの運動と結びつけ、共闘することを試みてきた。

1992年、質の悪い森林地域に住む貧困者のための農地分配プログラムを理由に実際には森林から追い出されてしまい反対運動をする農民達がいた。その時農民を支援するための食料を運ぶために北東部からスラム住民を引き連れてきたのは他にもないスーイット氏であった。これが後の時代に発展する都市貧困層と地方に住む人々の関わり合いが始まった時であった。そして、都市スラム住民が「小規模農民集会 (Assembly of Small-Scale Farmers)」の要求行動を支援し、土地改革ネットワーク (Land Reform Network) の旗の下で土地問題において農民運動と共に闘い、そして「貧民連合 (Assembly of the Poor)」<sup>5</sup>においても一緒に闘い抜いたのであった。

農民と関わる以外にも、スーイット氏が様々な人々と仲間となっていくスタイルは他の4地域スラムネットワークの活動でも目に見えるものだった。スラム住民が、労働者と連帯して国有企業の民営化に反対したり、各地の地域コミュニティのライフスタイルに損害を与えるような採鉱、ガスパイプライン、石炭火発電所に反対する様々なグループを支援

---

<sup>5</sup> 1996年3月と1997年1月、農民、ダム建設のために強制排除された人々、他の開発プロジェクトで森から追い出された人々、スラム住民等さまざまな「持たざる者」数万人がそれぞれのグループの要求を掲げて全国から首都バンコクまで行脚し、首相官邸前を何ヶ月もの間、占拠して共同生活をした。

してきた。また、2004年末のインド洋大津波の際にも、スラム住民たちは、即座に現地にかけて、寛大かつ献身的に津波被害者のサポートを行なった。

スラム住民が他の様々な「持たざる者」の運動と連帯していったことは、スーイット氏の考えと実践に基づいたものだと言っても過言ではないだろう。彼は土地、森林、ダム、有機農業、労働者、そしてスラムの問題などを扱うタイの人々の運動である貧民連合（Assembly of the Poor）の重要なアドバイザーの一人であった。スーイット氏は国内のネットワークを作り上げただけでなく、国境を越えた「持たざる者」のネットワークの構築も彼の努力の結果と言えよう。

2005年、スーイット氏は日本財団のAsian Public Intellectuals プログラムの一員として九ヶ月にわたり他国の活動について学んだ。彼はフィリピン、インドネシア、日本、韓国の活動家、友人たちと関係を構築していった。そして、直近では今年（2007年）になって、アジア各国で新自由主義的グローバリゼーションと強制排除に闘っている都市貧困層のコミュニティ・オーガナイズ運動のネットワーク組織である LOCOA(Leaders and Organizers of Community Organizations in Asia) が4地域スラムネットワークをグループの集會に招待したり、4地域スラムネットワークの委員会に代表者を送ったりした。タイにスラム住民が国際的なレベルで活動する場が出来たのもスーイット氏の貢献があったからである。

スーイット氏の活動の中でもう一つわすれてはならないものは民主主義のために闘い続けた彼の堅固な態度である。スーイット氏が学生の頃からこの問題に対して積極的であったことは、1973年10月14日、独裁者を追放するためバンセーンから同士（パルチザン；ゲリラ部隊）を引き連れてきたことからもしっかりとわかる。そしてスーイット氏は19年後に再び軍事独裁政権を追い出すために立ち上がった。1992年5月彼は民主主義キャンペーン、タイ学生同盟、民間社会部門、そして各地の民間団体のネットワークと協力し国家平和維持会議（1991年から力をつけた軍事クーデターグループ）の勢力維持に抵抗した。その時スーイット氏はデモ指揮の役をしていた。ジャングルで戦士として戦争を体験したことや、これまでの大衆運動の経験はデモ指揮と組織化にとっても役に立った。人々が国軍と武力衝突をすることがなかったのは用心深く思慮深いスーイット氏のリーダー性のおかげであった。最終的に軍が武力鎮圧を行って多数の死者・行方不明者をだした際も、スーイット氏はデモ指揮者として、非暴力の信念を持ち続け、民衆側の究極の損失は避けることが出来た。この出来事において、スーイット氏は、しばしば誇らしげに、「ス

ラム住民、持たざる者は、もはや自分達の飢えなど目の前の問題を解決するだけでなく、かれらの分析力を高め、構造的な問題にも取り組むことが出来るのだ」と話していた。その結果、1992年の軍事独裁政権の追放においては、スーイット氏と共に500人以上のスラム住民が「民主主義を求めるスラム組織 (Slum Organization for Democracy)」の名の下で共に共闘した。

1992年5月17、18日の流血の惨事後クーデターグループはその権力を諦めなければならなかった。そして1993年に選出された政府と共に民主主義の気運が再びタイに戻ってきた。スーイット氏と1992年の出来事に参加した彼の仲間は、政党による代表民主制ではなく、民衆が政治決定に直接参加する直接民主主義を推し進めるために、「大衆民主主義キャンペーン (Campaign for Popular Democracy :CPD)」の役割を復活させるべくこの時を利用した。この努力の結果は1996年から97年までに明らかになる。CPDは民衆が直接憲法草案作りに参加できるよう政治改革のキャンペーンを行った。最終的には1997年、全国の人々のネットワークがキャンペーンを支援した“緑の憲法”が議会で採択された。このタイの新憲法は、コミュニティの権利を保障すること、独立した組織によって行政府の監視や力のバランスを保つこと、民衆の側の政治参加を保障することなどをふくんでいたため、世界で最も先進的な憲法の一つだったと考えられた。もちろん、この一連の出来事とスーイット氏の関連を否定するのは不可能なことである。なぜなら1992年5月の出来事後スラム組織の連合は代表として彼をCPDの執行部に送っていたからである。そして2000年スーイット氏はCPDの事務局長になった。彼は活動計画の練り上げとCPDの新たな方向性の決定において重要な役割をになった。彼は「民主主義は貧困者のためのスペースを持ち、村民のパワーや不利な立場におかれている人々の利益に注目しなければいけない」という概念を持ち、一般的な「個人の権利や自由」と言った事柄を遥かに超えた“下からの民主主義”を主張した。

スーイット氏は民衆のための新しい道を築くべく2005年にCPDを去った。新しい政党を立ち上げることを決意したのである。しかし、タイ社会の進歩主義者は政治政党に否定的だったため、新しい政党を作ろうとする人はしばしば非難された。進歩主義者にとって政党とは資本主義のパワーゲームに参加するメカニズムにすぎなかった。それに加え、以前に政治に参加した左翼活動家は、最終的には、妥協を重ねることによって、みんな自身自身のイデオロギーを裏切っていたからである。しかし、スーイット氏が作ろうとしていた政党はそのようなものではなかった。彼は、基本的には新自由主義のフレームワークの

中でしか政策の違いをだそうとしない、他のすべての既存の政党のように、政治家が事務所を得るためのただの道具としての政党は作りたくなかった。それに代わって、彼は根本的で組織的な社会変革と参加型社会主義の主張する民衆政党のための正当をつくりたかったのである。彼はその政党を民衆側における活動の中心組織となるものにしたかった。最初の5年間、党は理念をはっきりさせ、すべての不利な立場にある人々、貧困者グループから大衆基盤を積み上げること、人々が共に闘い主張できる公約やプラットフォーム構築を軸に活動するはずであった。

スーイット氏が政党結成を決意したことは貧困者の運動を築くことやその運動を他のグループと結びつけることに反対していたという意味ではなかった。彼自身がそのような運動を進めていたのにそれに反対するはずがない。彼の真意は、活動家がずっと活動してきた様々なグループの民衆運動が、いまだに自分達自身が影響を受ける特定の問題だけに取り組む傾向があると感ただけなのであった。そこには他のグループとの多少の連携や互いに支援しあうことがあったかもしれないが、本質的には、彼らは完全に連帯・融合することはできていなかった。そのため、スーイット氏は新たな政党がそのギャップを埋めるためのメカニズムになるべきだと考えた。2005年の後半、スーイット氏は白い小型トラックで全国を回り、村民やNGOで働く友人、以前の同土と会い政党についての意見を交換した。時折彼はバンコクに戻り、ドゥアン・プラティープ財団の友人に資金を借りに行かねばならなかった。

新政党づくりの仕事が起動に乗り始めた2006年の始め、タクシン政権の追放活動をしている民衆側の調整団体「人民民主主義同盟 (People's Alliance for Democracy)」のための演説者としての役割を引き受けるためにスーイット氏は仕事を中断しなげばならなかった。警察中佐タクシン・チナワット率いるタイ愛国党は2001年に政権を取り、2期目の2005年には一党独裁政権の確立が可能となった。この政党は経済成長の成功、貧困者にアピールしたポピュリスト政策、タクシン首相の迅速で断固とした公務実地のスタイルなどのイメージがあった。しかし、その裏で政府がテレコミュニケーション資本をコントロールするグループを構成し、その中で国のリーダー達は国家そのものと利害が対立し、国家に損害を与え、さらに政策レベルでの汚職がはびこっていたという隠されていた事実があった。その上、この政権は人権を侵害し報道機関の自由をコントロールしていた。それに加え、政府はお金を使って憲法上独立しているはずの選挙委員会、憲法法廷、そして上院に介入し、監査・検査・均衡を保つ機能を腐敗させ破壊した。知識人、都市の中流階

級、組織化された貧困者運動に関わっている人々は、分析を可能とする情報を得て、政府の隠された事実に気が付き、彼らのタクシン政権に対する不満は日を迫るごとにたまっていった。それはスーイット氏にしても同じことであった。18人の地元コミュニティリーダーの暗殺を認めたこと、国家プロジェクトに反対するデモ隊に対する激しい鎮圧、国営であった石油会社の民営化、公聴会などをせずにアメリカとの自由貿易をはじめたこと、そして国営の電力・水道会社を株式市場で売ろうとしたことなどからスーイット氏はタクシン政権を第一期目から疑っていた。そして、Shin Corp をシンガポールのチナワット家に安く売り払った時、公共の通信ビジネスを外国人に売り払ったと捉えられタクシン政権に対する人々の不満はピークを迎えた。その結果、政府の退陣とタクシンへ政治の舞台から身を引くことが要求された。タクシン政権に反対するため人民民主主義同盟が結成されたとき、独裁的なシステム追放のためスーイット氏に再び声がかかったのである。この時は軍事独裁ではなく資本家独裁が国会議員をコントロールしていた。人民民主主義同盟はデモを数ヶ月延長したが、タクシンは権力から手を引くことを拒んだ。実はタクシンはデモ隊を武力で押さえつける準備をしており、それが結局彼の運命を封じ、人々の分裂をとめるためという名目で軍が力をつける結果となった。軍事クーデターの後、スーイット氏は貧困者との活動に戻り、新しい政党の公約の下書きのため情報収集をしていた。

2007年3月11日、ナコンパトム(Nakon Oathom)州の小作農民リーダーのためのセミナーから戻ってきた直後、スーイット氏は急な心臓麻痺で54歳の生涯を終えた。彼の早すぎる死は人々やタイの民主主義運動にとって大きな損失である。

多くのグループの人々がスーイット氏の死を悲しみ、彼の家族に対する寄付金は200万バートを超えた。1000もの供花は寺院の祈りの場をいっぱいにし、様々な階級の人々が彼のために集った。お葬式には元首相から野宿者グループなどの貧困者までが参加した。海外からもスーイット氏との絆をあらわすかのようにたくさんの友人が集まった。韓国の兄弟はスーイット氏に祈りを捧げるため海を越え“絆”という歌を演奏した。フィリピンの兄弟は追悼の詩を送り、マニラで追悼の式を行った。同じ頃、火葬場の正面には日本の野宿者たちからの別れの言葉が並べられ、また国際的な小作農民のネットワーク団体の La Via Campesina からの哀悼の手紙がパソコンのスクリーンに現れた。2007年6月9日土曜日の夕暮れ、歌手であり活動家であるナガ・カラワ(Nga Caravan)は民衆の国歌である“Saeng Dao Haeng Satha (Starlight of Faith)”を歌い、勇敢な闘士スーイット・ワトゥナーの生涯を称えた。

スーイット氏は私達のもとを去ったが、彼の高尚な精神と階級闘争への使命は残されている。

## 第二節 スーイット氏について

はじめに、第一章でのスーイット氏の生涯についての文章は彼に対する追悼文であることを考えて多少なりとも彼のことを過大評価している可能性があるということを注意しておきたい。

しかしそのことを考慮しても、スーイット氏がタイの貧困者運動において重要な役割を担ったことは否めない。しかしながら、彼は生まれながらにして特別であったというわけではない。先の文にもあったように、スーイット氏の両親は普通の農家であったし、家庭は裕福ではなかった。小さい頃から特別な教育を受けたわけではないし、強い力を持った家に生まれたわけでもなかった。そのような彼が国にまで影響を与えるほどの力をつけたのは様々な経験のおかげではないだろうか。スーイット氏は、ある時はジャングルにこもって戦い、またある時はたくさんの団体に入り世界中に友人を作った。このような経験が彼を成長させ、いかなる問題にも立ち向かう力を与えたのだろう。この追悼文を読みスーイット氏のことをある特別な人物だと思わず、人は様々な出来事を通し成長し、たくさんの人々とかかわることで強い力をつけることができると理解していただければ嬉しく思う。

彼を失った損失は間違いなく多大なものである。しかしこれでタイの貧困者運動が終わってしまうわけではない。事実、彼が亡くなる以前から HSF の仕事に関しては彼以外の人物が活躍していたし、下川先生が HSF の活動調査に行かれた時にはスーイット氏からこれからのタイの都市貧困者運動のリーダー的存在になるであろう人物としてこの追悼文を書かれたエック氏が紹介されたそうだ。そして何よりも、貧困からの脱却に大切なのは People's Process であるからスーイット氏がいなくなってもこのプロセスがとまってしまうわけではない。

おわりに

ここまで政府、NGO、個人の三つの側面から貧困者運動を考えてきた。この三つに共通することはやはり People's Process を大切にしているということであろう。政府が UCDO を設立する時には People's Process を強くすることが国の発展につながるという思いがあったし、スーイット氏も貧困者に寄り添い彼らと共に活動した。そして HSF はまさに貧困者を主体にして活動している。例えば土地所有の場合、居住地を探すのも貧困者自身であるし、家を建てるにしても資金を借りるが15年かけて返済していく。この方法で貧困者は自ら動くことを学び、People's Process を強くしていく。一方で、主体者を貧困者にすることによって HSF はサポートに徹することができるため組織としてそれほど多くの人員をひつようとしない。つまり People's Process の広がりを重視することこそが、HSF が限られた人数でもタイ各地で活動をすることができる理由なのである。そのなかでも、HSF が貧困者を中心とした考え持ったことネットワークを大切にすることは彼らが People's Process を進める上で大変重要であった。

このことは世界中の政府や団体が参考にすべきではないだろうか。政府は別としても、現在多くの貧困者のための団体が、たとえそれが NGO であったとしても、貧困者を救うため自らが進んで主体者となって活動しているように見える。実際短期的に考えれば、力も経験もあるスタッフが問題解決に取り組んだほうが時間も労力もかからないしスムーズに解決につながるだろう。しかし、それはその場しのぎにしかならず、また同じ問題がおきても貧困者が自らの力で問題解決をすることができない。それよりも、時間も労力もかかるかもしれないが最初から貧困者の力を信じ外部者は彼らのサポートに徹したほうが貧困者は力をつけることができる。また、ネットワークを作ることは貧困者同士の学びあいや助け合いの場をつくることになるし、政府団体と関わりを持つことで活動がしやすくなるということも知っておかなければならない。貧困者を主体者と考え、ネットワークを大切にすること、それが People's Process を強くする。そして People's Processこそが貧困からの脱却への確かな道となるであろう。

付け足しになるが、今回筆者が居住権獲得に対する活動に目を向けたのは、貧困者の生活向上において安心して暮らすことの出来る場を持つことは必要不可欠だと考えているからである。スラムに住んでいる人々はたとえその環境が悪かったとしてもいつ強制排除されるかわからない状況では環境改善の意欲はわかないし、たとえ改善のための努力をしても本当に強制排除が行われてしまったらそれまでの努力は水の泡になってしまう。そし

て強制排除をされる度に住むところを転々としていたら People's Process において大変重要であるコミュニティをつくることすらできない。このような理由から筆者は貧困から脱却するために土地の獲得は最優先されるべきだと考える。またこの論文の反省点は、HSF についての資料をあまり集めることができなかったため十分に団体について研究ができなかったことである。いつかタイを訪れ自分自身の肌で People's Process を感じたいと思う。

最後に、たくさんの資料をくださり相談にのっていただいた下川先生への感謝の気持ちをのべてこの論文を終わりたい。

2年間本当にありがとうございました。

## 参考文献

下川雅嗣 (2007) 「貧困者の現実、彼らの歩みとオルタナティブな発展 - アジアの都市部を中心に」 村井吉敬、デビット・ワンク他編著 『グローバル・ダイナミックス(グローバル・スタディーズ叢書第一巻)』 上智大学出版、183-206。

下川雅嗣 (2007) 「タイにおける国際居住年記念賞受賞者の活動報告」 『住宅』、80、46-69。

下川雅嗣 (2008) 「貧困者の歩み (People's Process) の発展: パキスタン、タイ、の事例から」 幡谷・下川編著 『貧困・開発・紛争-グローバル/ローカル相互作用』 4月刊行予定。

Abhayuth Chantrabha (2007) "For Suwit Watnoo, Fighter for the Lower Class in Thai Society" Translated by Jeff Wong

Wipada Kittikowit (1996) "Human Settlement Foundation", *SELAVIP Newsletter (Journal of Low-Income Housing in Asia and the World)*, April 99-100

Wipada Kittikowit (1997) "Human Settlement Foundation", *SELAVIP Newsletter*, April 131-134

Wipada Kittikowit (1998) "Human Settlement Foundation (HSF)-1997 30 June 1998", *SELAVIP Newsletter*, April 139-142

HSF (2001) "Human Settlement Foundation-2000", *SELAVIP Newsletter*, October 99-102

HSF (2003) "Human Settlement Foundation", *SELAVIP Newsletter*, October 81-84

HSF (2005) "Human Settlement Foundation 2005 Annual Report", *SELAVIP Newsletter*, October 87-88

Somsook Boonyabancha (2005) "Baan Mankong: going to scale with "slum" and squatter upgrading in Thailand", *Environment and Urbanization 17(1)*, 21-46